
純・愛 ~ pure love ~

黒羽 星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

純・愛 〜 pure love 〜

【Nコード】

N9102U

【作者名】

黒羽 星

【あらすじ】

あの有名な“ロミオとジュリエット”

原作の他には、アメリカの若者を描いた「WEST SIDE STORY」がある。

では、日本で同じことが起こるとするなら…。

時は平安時代。

二人の若者。

運命の齒車により巡り逢わせられる定め。

二人はこの定めを“純愛”であるがゆえ、ただ受け入れるしかできなかつたのか…。

優雅な貴族社会と摂関政治によつて翻弄される二人の定め。

今、平安時代の二人の“純愛”が、ここによみがえる。

〈睦月〉

《序》

時は平安。所は京の都。

ここに若き男と女。

知らず知らずのうちに出会い、惹かれあってしまうこの二人…。

我々が生きるこの世には、『運命』というものがある。

つまり、『運^{めぐ}りゆく命^{いのち}の定め』である。

その『定め』がもたらすものが『幸』か『不幸』かは、誰にもわからない…。知る術もない。

ただ、『幸せ』な結末を祈り、見守ることしかできない…。

この二人の『運命』、いかなる『定め』に辿り着くのか…。

さあ、

今ここに、二人の『運命』の物語りを始めよう…。

《睦月》

【寒き白

淡き光に溶かされ
運命の人
ここに導かん】

京の都、八条殿はちじょうでんに、一人の若き男子おのこがおります。

名を『純』あやといい、みな純君あやぎみと呼びます。

左大臣の祖父、大納言の父を持ち、見目美しく、聡明で、そして何
と言ってもその名のとおり、優しく純心な若君でございます。

この純君、現在、頭中將くわちゅうしやうとして宮仕えしておられます。

つまり、蔵人所（天皇の勅旨や上奏を伝達する）の責任者であり、近衛府（天皇や皇太子の警備をする）の中將を兼任されています。

隣にいるのは真空君みそらぎみと紫苑君しおんぎみでございます。

真空君は、先の右大臣菅原道真公の孫にあたります。

無鉄砲であどけなさの残る方。

純君と同じ近衛府で少將として宮仕えしておられます。

そして、もうお一人。

物静かで、純君と真空君にとっては兄のような存在である紫苑君でございます。

橘家の御子息で、参議として宮仕えしておられます。

三位宰相さんみのさいしやうとも呼ばれ、太政官での政治に参加しています。

今日、ここ大内裏の紫宸殿ししんでんでは“元日節会”がんじつのせちえが行われております。

*元日節会：元日を祝い、天皇が紫宸殿におでましになり群臣に宴を賜う儀式

三人もこの元日節会に招かれ出席しております。

そんな折、

「みな、良い顔をしている。新年というだけで、心が晴れやかになるのは何故だろう…」
と純君。

すかさず、

「何て呑気なことを！何故、我々は元日から内裏に来ているのだ！今日ばかりはゆると過ごしたいではないか！」
真空君が苛立ちをぶつけておられます。

すると紫苑君、

「そう言っな、真空。我々も身分ある身。それに、ほら、あれを見てごらん」
と。

その指さす先には内裏の女房達が、三人の参内の噂を聞き付け、集まり騒いでおりました。

そう、この三人、都で評判の美男子なのでございます。家柄も良いですし…。

「ああ、そうだな…。うーん、では今日はどこの女房に文ふみを送ろうか…？」

とウインクを飛ばす真空君。

女房達の黄色い悲鳴が聞こえます。

* 真空君の『文』と言えば、もちろん『恋文こいふみ』でございます。

間をおかず純君が、
「またか？ いい加減にしとかないと、また痛いめにあうぞ！」
と心配されています。

すると真空君は、
「純は相変わらず子どもだなー！ どこそその姫に、想いを募らせているわけでもなし。少しは女子と遊んだらどうだ！？ なあ、紫苑もそう思わないか？」
と。

紫苑君、

「そうだな。純は、女子と遊ばないからな。例の“運命”の恋を追いかめるのもいいけど…。結局、未だに、“運命”の恋なんて見つけれないんだろ？試しに、桐壺の女房にでも文を書いてみよう。見目好い女房が多いよ」

すると慌てて純君が、

「そんな簡単に文なんて書けないよ…」
と顔を赤らめ、うつむいてしまいました。

「アハハハは！やっぱり駄目か。純にはまだまだ早いのだな」と、真空君は笑いながら女房達の中に消えて行きました。

紫苑君は、純君の背中をそつとたたき、
「真空の言うことは、気にしないでいいよ。純は純の想いを寄せ
る人を探し出せばいいさ。まあ、それには、ひとまず一歩踏み出さ
ないといけないかな…」
と。

純君は、ただ軽く頷き、宴の席に戻っていかれました。

一人残された紫苑君。

そこに賀茂神社の宮司がやってきました。

「まだ純は“運命”の恋に恋しておられるのかな？なあ、紫苑」
宮司が話しかけます。

「そのようで…。純の一途さにも困ったものです。もう18になったのです。少しは浮いた話がでて良いと思うのですが…」
心配そうに応える紫苑君。

「人には“定め”というものがある。我々がどうこうできるものではない。純がその“定め”に巡り会うまで、我々は気長に待とうではないか…」
宮司は諭します。

「そうですね。“定め”…。どうか良い“定め”に純が巡り会えますように…」

紫苑君は、祈るのでありました。

白銀の大地が広がる京の都。

しかし、あちらこちらの樹々の先は、

ほっこりと膨らみ始めております。

まだ見ぬ愛しき恋人に、想い膨らませるかのように…

〈如月〉

《如月》

【ゆく時を

心一途に乞い願う

運命の人

ここへ導かん】

ここ土御門殿つちみかどでんに一人の女子おなこがおります。

名を「愛」（ちか）と言い、みな「愛姫」（ちかひめ）と呼びます。

右大臣藤原道長公の五女で、母は源雅信の娘、倫子でございます。

源雅信、そう、倫子は純君の叔母にあたります。つまり、純君と愛姫は従兄妹になるのでございます。

また、愛姫は道長公の五女であるため、通称「五の姫」と呼ばれ

ております。

愛姫の隣で読み書きを教えているのは、女房の結城^{ゆづき}。

今日は、平仮名の書き取り練習のようでございます。

「愛姫様、本日はさらさらと筆が進みますこと！何か良きことでもありましたか？」

結城は尋ねます。

「えっ！？結城にもわかるの！？今朝、夢枕に白い豊かな髪の毛は美しい仙女様がいらっしやって、『“運命”の人と、間もなく出会えるでしょう』っておっしゃったの」

「なんと！仙女様が夢枕に！姫様長年の願いをお聞きくださり、お告げを与えて下さったのですね」

「そうなの、きっと良い“ご縁”を見つけて下さったのよ！」

この姫もまた、“運命”の恋に恋しておられる訳で…。

「姫様はどのような殿方を所望されておいで？」
結城が冷やかします。

「そうね。私は…、私の願いはただ一つ。私をただひたすら愛してくださる方…」

「そんな適当なこと、簡単に口にしてはいけないよ」

突然、男の声が…。

ふと御簾の外に目をやると、愛姫の兄、桜華殿おうかがいらっしやった。

「兄様！立ち聞きとは、はしたのうございます！それに、愛するということは簡単なことではございません！……、それにしても、本日のお勤めは終わりましたの？」

「ああ、終わったよ。父上と勤めで顔を合わせるといのは、なぜこつも疲れるのだろうか…」

「内裏でのお仕事とは、大変お疲れになるものなのですな。姉様達は、内裏にずっといらして、大丈夫なのかしら…」

愛姫は宮中に嫁がれた三人の姉（彰子・妍子・威子）を想う。

彰子（太皇太后）は今は亡き一条天皇に、妍子（皇太后）は三条院に、威子（皇后）は現在の後一条天皇に嫁いでおられます。

「彰子達は幸せそうだったよ。何と言っても、内裏に住まう身だ。何の苦もなく生活しているさ！ ゆくゆくは、お前も………」
と、桜華殿は淋しそうな表情で愛姫を見ておられる。

「どうかなさったの、兄様？」

「いいや、何でもないよ。だが、愛姫よ。簡単に夫となる男の話を父上の前で話してはならないよ」

桜華殿はそういうと母屋に戻られた。

「兄様、内裏で何かあったのかしら……。姉様達の話をした時、淋しそうなお顔をされていたわ。姉様達は、幸せに過ごしていらいっしやるとおっしゃっていたのに……」桜華殿のことを心配する愛姫。

しかし、心配すべきは、今後、ご自身がどのような“運命”に巡り逢うかであったのに……。

まあ、今の愛姫には予想もできぬことではございますが…。

愛姫は再び筆をとり、心のままに言葉を綴るのであった…

〈弥生〉

《弥生》

【我が人生

己の信ずるままにいざゆかん

運命の人

ここより導かん】

本日も、内裏では皆々がせつせと働いております。

「おお、これはこれは頭弁殿^{くづしん}。昼からのご出仕とは！頭弁殿の夜は我々よりも、いくぶん長いようです…」

真空君がいつもの様に桜華殿をからかい始めました。

桜華殿は中弁^{ちゅうべん}という立場で純君と同じ蔵人頭として仕えているので、通称そう呼ばれるのでございます。

「ほんに……。私の夜は、君達よりゆるりと流れるのよ。私のように、何事にも長けている者にはね……」桜華殿もいつものようにさらりと話をかわします。

「くそー！！やはり気に入らん！お前は、嫌いじゃ！」
真空君、怒っております。

「先の右大臣道真公も、そのように粗雑で怒りやすかったのであるから、内裏に雷など落としたのだ。ああ、なんと恐れ多いことか……。そのような子孫がのうのうと内裏に出仕しているとは、お上はなんと心が広いことか……」

「何だと~~~~！！！！うッ……………」

「真空、いいかげんにしないか！相手にするな！落ち着け！」

紫苑君が二人の間に割って入られました。

「おお、これはこれは紫苑君。ちゃんとご友人の手綱を握っておいてください。でないと、内裏が騒々しくて仕方ないよ」

「なんだと~~~~！！！！うッ……………」

「だからちよつと落ち着け！」

真空君、紫苑君に再び口をふさがれます。

と、そこに…

「これこれ真空、何に苛立っておるのじゃ。道真公の孫ともあろうそなたが、そのような者相手に…。おつとこれは失敬、桜華殿はただそこにいたのじゃったな」

「これは左大臣殿。私がいると出来ぬ話でもおありか？」

「そうではない。偉大な先祖を持つ者としてどうあるべきかを真空に教えようとしたのじゃ」

そこへ、さらに右大臣道長公がいらっしやいました。

「偉大な先祖とは…。まあ、なんと大それたことを…。桜華、お前は職務に戻りなさい」

「はい、父上」

桜華殿はその場をあとにされた。

「さあ、お前達も職務に戻るがよい」

「はい。後は…、お任せいたします。おい、真空行くぞ」

「私は…、私のお祖父様は、偉大なお方じゃ！」

そう言い残して、真空君も職務に戻っていかれた。

さあ、ここに左右大臣がそろった訳で…。少し二人の会話を聞いてみましょうか。

「藤原家の三姫様^{さんのひめ}が、中宮になられること、お祝い申し上げます」

「ありがたきことで。我が娘、威子も早く皇子を授かると良いのですが…」

「そうですね…。我が孫娘でもある威子。体を大事にとお伝えください。では後ほど」

「では」

この二人、表面ではこのように穏やかに装っておりますが、希代のライバルにございます。

左大臣源雅信公は、左大臣という政治に置いて内裏ではトップの座にあり、政権を手中にしておられます。

が、対して右大臣藤原道長公は、娘を帝の后にしその子どもとの外戚関係を利用し、左大臣の上の位である関白の座を狙っておられるのです。

この相いれぬ二人。

現在のお立場にいたるまでに、左大臣源雅信公は娘倫子を右大臣藤原道長公に嫁がせました。
藤原家と血縁関係になることで、道長公の計画を我が物にしようとしたのです。

しかし、道長公もそれをわかっていて倫子を正妻として迎えたのです。

なんせ道長公にとって倫子は、帝の後として嫁ぐ娘を産ませる為には、十分に高い‘身分’を持っていたからでございます。

ですから、二人の思惑は平行線を辿るばかり…。

しかし、威子が后になることが先月決まり、情勢が少し変化してまいりました。

威子の上に二人の姉がおりますが、この姉二人も先帝、先々帝に嫁いでおります。

ということとは、太皇太后、皇太后、皇后、これら三后を藤原家の娘三人で占めることになるのです。

この先、東宮にまで藤原家の娘が嫁いでしまえば、完全に藤原家の天下になってしまうでしょう…。

そうはさせまいと、左大臣源雅信公は政治の手腕で、今の地位を死守しておられるのです。

ですが、跡を継ぐはずの息子雅純まさひと殿は、政治の世界には向かぬ気性で、雅信公としては聡明な孫の純君に期待しているのです。

まあ、純君も争い事は好かぬ方でございますので、雅信公は何とか政治に加わらせたいと、東奔西走されているのでございます。

その気持ちを知ってか知らずか、純君も今のお仕事を精一杯果たそうとはされております。

この先、いかなる“運命”が待ち受けるかも知らず…。

これは、春の陽射しが心に染み渡る、そんな日々のことでした…。

〈卯月〉

《卯月》

【一目みて

互いの想い通じ合う

運命の人

君に導かん】

「姫様く、愛姫様くく！どちらにおいでですか？姫様く」

朝から女房の結城がバタバタと愛姫を捜しまわっております。

「何をそんなに慌ただしくしているの？どうしたの？」

「愛姫様！こちらにおいででしたか！落ち着いてお聞きください」

「落ち着くのはあなたよ、結城。少しお茶でもお飲みなさい。大内裏で採れたお茶だそうよ」

「まあ、ぜひいただきます。ゴクゴクゴク……。美味しゅうござ

います。……、え〜っと…、お茶をいただきに参ったわけではございせん！」

「どうしたの？」

「姫様、落ち着いてお聞きくださいませ」

「だから、私は落ち着いてるわよ。落ち着きがないのはあなたよ、結城」

「はい…。はしたなくして申し訳ありません。では、本題をお伝えします！姫様、姫様が今年の‘齋王’に選ばれたのでございます！」

「‘齋王’ですって！？何を馬鹿な事を言ってるの？こんな時期に…」

「馬鹿な事ではございません！」

「だって、すでに橘家の姫が選ばれ、賀茂で生活していらっしやるのよ」

「それがでございます、それが、橘家の姫様が流行り病にかかられて、‘齋王’としての御役目が果たせそうにないそうで…。そこで、愛姫様に‘齋王’をとのお話 came たようでございます」

これは大変な御役目がまわってきたようでございます。

‘齋王’というのは‘賀茂祭’で花形の役目。勤めるのは未婚で、身分の高い家柄の女性。前もって選ばれ、不浄や仏事を避けた生活をおくり、祭事に従事しなければなりません。しかし、これは急な展開でございます。なぜなら‘賀茂祭’は明後日なのですから…。

「これから‘齋王’になるなんて！私には無理よ」

「そんな不名誉なことは言わないでくれ」

兄君の桜華殿が来られました。

「兄様！‘齋王’の話は本当ですか？」

「本当だよ」

「どうして私ですか？私でなくてもよろしいではありませんか？」

「そんな事はない。愛以外に‘齋王’として年相応で名家の女子はいないのだよ」

「そんなの嘘ですわ！どうせ父上様の政略でしょ！？姉様達みたい
に…」

「そんなことないよ。こんな名誉なお役目、そうそうあるものでもない。私は、愛の華やかな姿を、見たいと思うが…」

「私も『斎王』には憧れておりましたけど、こんなに急では、心が穏やかではいられませぬ。『賀茂祭』は明後日ですよ。本当なら楔ぎも終わっていないなければならないのに…」

「それは大丈夫。お上、それに宮司も了承済みだよ。これから、もう一度、楔ぎの儀をしてくださるそうだ」

「そうなの。それなら、やってもいいかしら…」

「ぜひお引き受けするべきです、姫様！」

結城が堪えきれず声を発した。

「あら、私より結城のほうが『斎王』になりたいみたいね」

「失礼いたしました」

桜華殿、愛姫がそんな話をしておられるその頃…。

内裏では

「なあ紫苑、幸子の様子はいかがか？」

「ああ、純か。幸子は、一命は取り留めたよ。まだ予断を許さない状態だそうだ…」

「それはまだ心配だな。体を一番に考えるよう、伝えてくれ。なんせ『賀茂祭』のことばかり考えていたからな、今まで…」

「ありがとう、そう伝えるよ。それより、新しい『斎王』はきまつたのか？」

「ああ、決まったよ。藤原家の三の姫だ」

「藤原家か…。そうだよな、あの道長公が黙っていないよな、こんな良い機会。悪いな、我が妹が流行り病なんかにかかってしまつて…。」

「そんなこと言うなよ。僕は幸子を可哀相に思うよ。幸子は悔しいと思うんだ、辛い賀茂での生活を経験してない人に代役をされるなんてね」

「純…、君はなんて優しいんだ。本当にありがとう」

「ありがとうだなんて、水臭い！僕と紫苑の仲じゃないか！」

「純…。ところで君のほうは大丈夫なのかい？『勅使』だろ」

「ああ、そつちはなんとかなるさ！去年もやってるし」

「そうだったな。あの後は大変だったな。女房からの文といったら、牛車一台では運びきれないほどであったからな」

牛車一台分だと軽く千通は越えますね。流石、純君でございます。

「そんな事はどうでもいいよ。とりあえず幸子が無事それで良かった。僕は『賀茂祭』の準備の最終調整をしてくるよ。では」

純君は行ってしまわれた。

「相変わらず真面目だね純は…。それにしても道長公。大胆にも公

の場に姫を連れ出したな。見目に自信のある姫なんだろうな…」

そのとおり！愛姫は美しくお育ちです。そんな姫をずっと隠しているような道長公ではございません。

さあ、そうこうする間に時は流れ、ついに「賀茂祭」の日を迎えてしまいました。

「賀茂祭」というのは平安から平成の世までもずっと続く祭でございます。五穀豊饒を祈る祭で、内裏でお上から御祭文と御幣物を賜り、行列を作り賀茂神社へ奉納に行くのでございます。

またの名を「葵祭」といい、フタバアオイの髪飾りをつけます。

今、純君は行列に参加する者に「フタバアオイ」の髪飾りを配り分けております。

「これ、その女房…。これは「斎王」の分である。しかと、お渡しするよう……に………」

純君は言葉を失ってしまわれた。

そこには白肌に赤い血色の唇、豊かで艶やかな黒髪の「女子」がい

ただ。

まさしく、その‘女子’こそが愛姫だったのでございます。

愛姫も勇壮な純君の姿に目を奪われ、その声に心奪われておりました。

人がこの世に生を受け、天に召されるまでには様々な‘運命’が待っておりませんが、この時ここに、二人の‘運命’が重なり、その歯車が回り始めたのでございます。

「はい……。ところで、あなた様はどなた様で……」

「私は今回の……」

純君が名乗るとした時でした。

「愛、支度はできたかい？」

桜華殿が現れた。

「愛。愛とおっしゃるのか……」

ハッ、と我に戻る純君。

「これはこれは、ここで何をされているのか？」

「私は…、私は葵の髪飾りを配っているだけです」

「そうか、ご苦労なことで。もう済んだのなら他を回ったほうがいいのではないか？」

「そ、そうだな。悪かった、長居をしてしまった。失礼する」

純君は足早に去っていかれた。

「大丈夫かい、愛。何か変な事はされなかったかい？」

「……………」

「おい、愛！どうした？」

「あら、兄様…。どうしたの？こんなところで…」

「どうしたもこうしたもないだろ！愛こそ大丈夫かい？ぼーっとしてるよ」

「ぼーっと？……………ねえ、兄様、今ここにいらっしゃった方はどなた？」

「今の若者か？愛が気にするような人ではないよ」

「お名前は？」

「愛は知らなくていいよ。それよりも、祭りの支度をしなさい。では私は行くよ」

桜華殿も部屋から出ていかれた。

さあ、絢爛豪華な祭が始まります。

民衆の歓声が京の都を覆いつくすように、純君と愛姫の想いも、互いを優しく包み始めるのでした…

《 皐月へ続く 》

〈臯月〉

《臯月》

【愛しき君

この心を受け取りたまへ

運命の人

君に会いたい】

双葉葵の髪飾り。

目に艶やかな行列は、内裏を出発し下鴨神社での儀式を終え、上鴨神社へ向かっております。

純君は、女房の行列の中に愛姫の姿を探しておられました。

女房の行列にいるはずもない愛姫の姿を…。

純君の勘違いなのでございます。

愛姫は“女房”だとは一言もおっしゃってはいないのでから。

「ああ、あの方に、もう一度会いたい。あの方はどこにいるのか…」

乗馬したまま辺りを振り向きなされるため、行列を見に来ている見物人、特に女子たちはソワソワとしておりました。

皆、自分のことを気にして、振り返っているのではないかと思っているのです。

そうこうしてる間に、行列は上鴨神社に到着いたしました。

純君が、社頭にて祭文を奏上し、舞人は雅な舞を奉納し、真空君や桜華殿の参加された走馬の儀が執り行われました。

ここは走馬も終わり、人もまばらな夕暮れ時の糺の森。

一人たたずまれる純君。

「とうとうあの方、愛を見つけ出すことはできなかった。もうお会いすることはできないのか…。」

「そんなことはございません。」

ふと振り返ると、そこには十二単を身にまとった愛姫がいるではありませんか！

「あなたは！ずっと、探していたのですよ！どこにいたのですか？」

「ずっと、あなた様の後ろにいましたわ」

「私の後ろに？」

「はい。ずっと…。」

「私の後ろの女房の中に、あなたの姿を見つけることはできませんでした。」

「女房の中に？」

「ええ、女房の中に…。あ！あなたのその姿。あなたは、女房ではないのか？」

「はい。私は、藤原道長の娘、愛でございます。」

「藤原道長殿のご息女。あなた、あなたが愛姫でしたか！今回、斎王をされていた！私が葵を渡したあなたが斎王だったのですね。愛姫、あなたはなんて美しいのだ…。」

純君は、その右手で愛姫の頬にふれ、じっと目を見つめ、語り続けます。

「あなたの瞳に、私の胸は釘付けにされ、もう離れることができません。」

愛姫は、純君の右手に頬をすり寄せ、

「あなたのその声…。私の耳にはその口から紡がれる言葉しか、もう聞こえないのです」

「ほら、糺の森の神々が、あなたとの出会いを祝福してくれているようだ。見てごらん、天に瞬く星たちが、月が私たちを照らしている。」

糺の森の樹々のあいまから、美しい月の光が差し込み、純君と愛姫だけを照らし出している。

そこだけが、この世の光ある場所かのように…。

《水無月へ続く》

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9102u/>

純・愛 ~ pure love ~

2011年11月24日01時51分発行